

## 断熱耐震改修工事 3～トイレ部屋

寒さに耐えかねて改修工事を計画していたころ、こんな山奥にも公共下水道が通るとのお達しがあった。説明会の会場に着くなり「井戸はありますか」と尋ねられる。「はい」と答えると、すかさず書類にチェックが入り、渡されて入室の運びとなる。説明によると井戸がある場合は自費でメーターを取り付けること、そして井戸水の使用量に応じて下水道料金を徴収するとのことであった。父は敷地と畑の境界近くに井戸水の立水栓を設けホースを伸ばして畑に水をまいていた。そんな水にも下水道料金がかかるのだそうだ。敷地内に公共汚水桝が設置されるや、そこに住む人は都市計画事業によって著しく利益を受ける「受益者」とされ受益者負担金が課せられる。それは下水道利用の有無には一切関係なく、長野市の場合は敷地面積に応じて課せられる。5年で20回の分割払いなら満額だが一括払いなら目いっぱい勉強してくれるとのこと。“死ねば払わんで済む”と5年を選ぶ人もいたが、私はまだ生きていたので分割払いを選んだ。かくして著しく利益を受けた「受益者」は、いつの間にか債務者になっていた。しかも毎年送られてくる請求書には、徴収の責任者として過去に見覚えのある先輩の名前が大きく印刷されており、逃れようなどある訳もなかった。

東日本大震災の時、石巻の避難所では末端の下水処理施設が機能しなくなり水洗トイレが使えなくなったとTVが報じていた。人々は各自新聞紙にくるんで決められた場所まで運ぶとのことだった。自立していない建物は辛い。循環の暮らしで成り立っていたこの養蚕農家にはやはり自立がふさわしい。いつどこで寸断されるかわからない下水道網に身をゆだねずとも、この山奥なら生きる道があるだろう。トイレは簡易水洗式とし、雑排水は敷地内に掘った直径2メートルほどの浸透桝に流し続けることにした。簡易水洗式トイレとは汲み取り式の改良版だが、臭突と呼ばれる換気扇をつけるので臭いも気にならず、コップ一杯程度の水で汚物を便槽に流し込み、定期的にバキュームカーが汲み取りに来てくれるという方式のトイレである。下水道が未整備の地域では、合併浄化槽より安価なこともあってか店舗などでも使われている。初めに水を流し、ペーパーを敷いてから使うとコップ一杯程度の水でも意外に綺麗に流れてしまう。INAXにはウォシュレット付きの簡易水洗便器もあり、増築時の車椅子トイレにはこの便器を設置した。

今回は古家のトイレである。既存は男女別になっていて手洗がついている昔ながらの普通のトイレだが、面白いのは外から直接出入りできるようになっていることだ。さらに外部北側の壁には小便器が設けてあり農作業時に地下足袋などを脱ぐことなく使える工夫だろう。農作業でなくても男たちが出かける寸前などに使っているのを見ると結構便利そうに見えた。工事を担当した工務店は首をかしげながら「これは撤去ですね」と言ったが、重宝しているようなのでそのままにしてある。

ほとんど誰も使わなくなっていたトイレだが、内部の仕切りをすべて取り払えば約2.5帖ほどになる。無駄と思えるほど広いトイレはなぜか気持ちがいい。化粧、着替えなど、その部屋でいろいろなことができそうなトイレがいい。住宅だから別にトイレで化粧したり着替えたりはしないが、いろいろな行為が可能な場というのが魅力になるのではないか。逆を言えば、用を足すだけのトイレには好んで行きたいと思わないというのが根底にあるだろう、特に女たちには。既存便器の便芯の都合で、ここで使える便器は背中にタンクなしのタイプになる。図面を描いていて、どうも納まり具合がよくないので背もたれふうの板を取り付けることにした。このあたりの農家では、櫛のこたつ板が納屋などに無造作に置いてあるのを見かける。この家にも何枚か残っていたのでそれを便器の背もたれと手洗カウンターに利用することにした。入口の建具は、廃品の襖から組子だけを取り出して、組子の額入りフラッシュ戸とした。



簡易水洗便器と  
叔母の鏡台



手洗カウンター



入口の引き戸  
廃棄された襦の組子を再利用

鏡をどうしようかと考えていた時に見つけたのが亡き叔母の鏡台だった。叔母のものと思われるスカーフを敷いて、その上に鏡台を置いてみた。兄と、恐らくは恋人を戦争で亡くし精神を病んだ叔母、遺品をみるとおしゃれな人だったことがうかがえる。それらを今に生かすことで叔母にもう一度この家の風に触れてもらえている気がする。



改修後の外観

(終わり)